

# 直近の農政・営農情報

令和3年10月

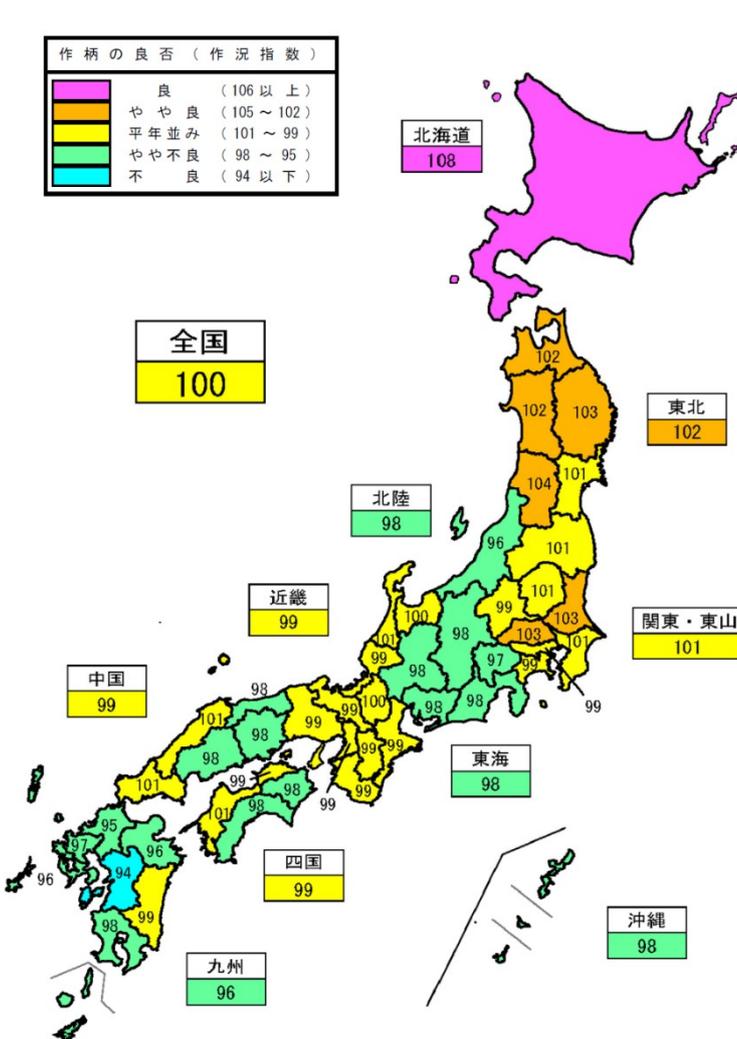


## I. 米をめぐる情勢

### ●全国の作柄概況は「100」、三重県は「99」

- ・農林水産省の発表によると、2021年産水稻の作柄概況（9月25日時点）は、全国で100の「平年並み」となった。地域別にみると、北海道が108で「良」、東北が102で「やや良」と豊作傾向になった一方で、北陸・東海・九州ではいずれも98の「やや不良」となった。
- ・三重県は99で「平年並み」となった。
- ・北・東日本の作柄が比較的良く、西日本の作柄がやや悪い傾向はここ数年続いている。今年はず年のトビイロウンカのような大きな病虫害は発生しなかったものの、低温や日照不足など天候不順の影響がみられ、作柄の地域差につながったとみられる。

【2021年産水稻の作柄概況（9月25日時点）】



### 三重県の作柄概況

- 作柄概況指数：**平年並み**（99）
- 穂数：**やや少ない**
  - ・5月中下旬の日照不足が影響
- 1穂あたり籾数：**やや多い**
  - ・穂数が少なくなった補償作用
- 全籾数：**平年並み**
  - ・穂数はやや少ないものの、1穂あたりの籾数がやや多くなった
- 登熟：**平年並み**
  - ・7月下旬の高温多照で稔実は良行も、8月の低温日照不足により粒肥大等の抑制がみられた

（農林水産省資料より抜粋）



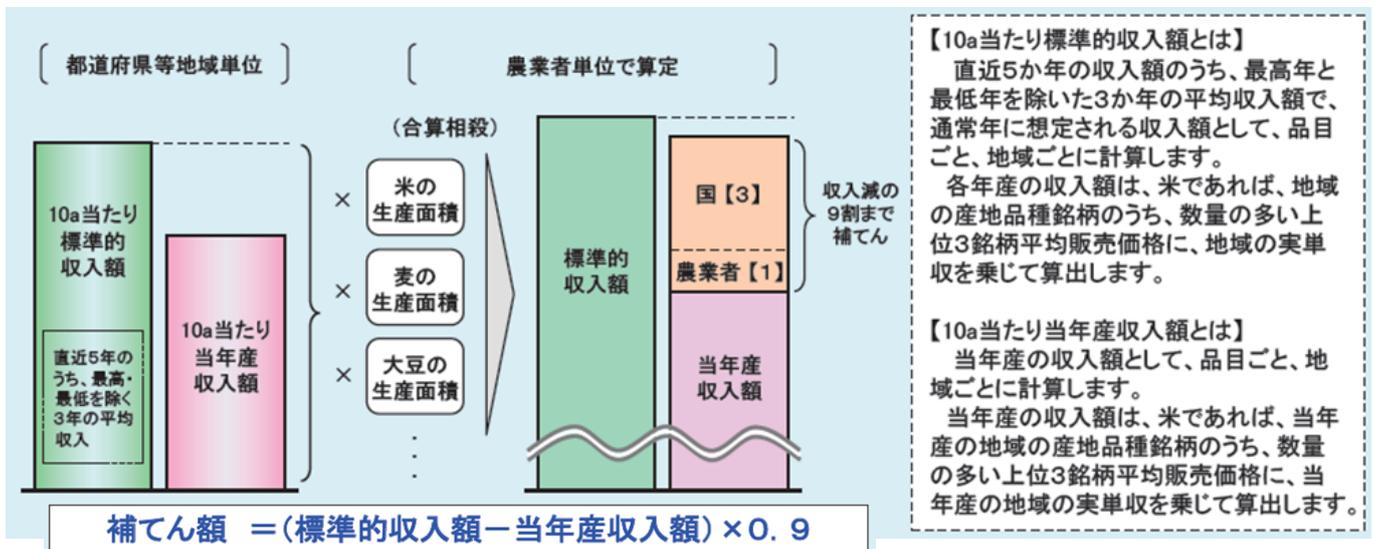
### ●予想収穫量は国の適正生産量を1%上回る見込み

- ・全国の水稲の10aあたり予測収量は539kg(前年+8kg)となり、主食用米作付見込面積130万3,000ha(前年-6.3万ha)を乗じると、2021年産主食用米の収穫量は700万2,000t(前年-22万4,000t)となる見込み。
- ・「過去最大規模の作付転換」によって、国が示した2021年産米の適正生産量を、面積ベース(前年-6万7,000ha)ではほぼ達成できたものの、収量ベース(693万t)では7万2,000t上回る見込みとなった。
- ・7月時点で農林水産省は、適正生産量を達成しても2022年6月末の民間在庫量は210万tとなり、適正水準の上限である200万tを超えるという見通しを出している。コロナの収束によって米需要が想定より回復する可能性もあるものの、2022年6月末民間在庫量は、見通しを超える216万t程度と考えられる。
- ・三重県の水稲の10aあたり予測収量は495kg(前年+16kg)となり、主食用米作付見込面積は2万5,900ha(前年-800ha)となった。

### ●農林水産省が農家の資金繰り対策を示す

- ・農林水産省は12日の自民党農林合同会議で、出来秋に米の販売収入が減少する農家の資金繰り対策として、ナラシ対策の補填金や水田活用直接支払交付金に相当する額を無利子融資する方針を示した。
- ・一般に、農家が水田活用直接支払交付金を受け取るのは同年12月～翌年3月、ナラシ対策や収入保険の補填金は翌年5～6月になるため、これらを受け取るまでの資金繰りを支援することが狙い。
- ・一方で、岸田首相は衆参両院本会議にて、「政府備蓄米を需給操作のために運用することは制度の趣旨に沿わない」と述べ、政府による過剰在庫の買入れに対して否定的な姿勢を示した。

### 【ナラシ対策の概要】



(農林水産省作成の経営所得安定対策パンフレットより抜粋、本会で一部加工)